

『道法會元』における符名の統制

早川美彩 松本浩一 宇陀則彦

筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科

道教における符は、道教研究者にとって重要な研究対象である。これまでの研究により、道教の符に関する研究の支援を目的として、道教呪術を集大成した資料である『道法會元』を使用した符の画像データベースが作成されている。それにより符名による検索が可能となったが、符名は、その目的や使役している神将名などの様々な観点から付けられており、統一した検索が困難であると言える。そこで本研究では、符名による検索を行うことを想定して、符名に含まれる用語の整理・統制を行った。

Rearrangement of the titles on the “*Dao-fa Hui-yuan*” database

Misa Hayakawa Kouichi Matsumoto Norihiko Uda

Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

“*Fu*”, Taoism sheet, is one of the most important items for Taoism researchers. In a current research, the image database of “*Fu*” has been built to help researchers, which sources are from the Taoism book “*Dao-fa Hui-yuan*”. With this database, researchers can search images of “*Fu*” by their titles. However, these titles are not well-uniformed since they are named by various viewpoints, like by its purpose or by the name of its “*shinsho*”, a servant spirit, and so on. This disunion may cause a failure to search on the database, since “*Fu*” of the same kind might be recognized as a different kind. This research, therefore, will focus on taking keywords out from the titles of images and rearranging them to make it easier to search on the database.

1. はじめに

近年、図書館や大学、その他研究機関などにより、古典文学や歴史資料の電子化が急速に進んでいる。これらの資料の電子化は、内容の保存および利用範囲の時間的空間的拡大を目的として行われており、特に資料の劣化が心配される古典の原典や歴史資料において推し進められている。これらの電子化にあたっては、ただ資料を文字データ、画像データとして保存するだけではなく、電子化資料の研究利用を目的とした使いやすい研究支援ツールが望まれる。

本研究では、電子化された『道法會元』を対象として研究を行う。『道法會元』は図が重

要な意味を持っている文献であり、これには日本の「お札」にあたる「符」や、儀式の時に道士が行う特殊な歩き方を示した「罡」など様々な種類の図が含まれている。この『道法會元』中に含まれる図については宇陀則彦、松本浩一研究室の共同で電子化が行われており、検索機能や分析機能に関する研究が行われてきている。本研究では、符名による検索の再現率を向上するため、符名に含まれる用語の統制を行った。

2. 『道法會元』とその電子化

『道法會元』は、中国道教の経典を集成した『正統道蔵』に含まれている。雷法を中心とした諸派の道法を集大成したものであり、

二百六十八巻もの分量を擁し『正統道蔵』の中でも屈指の大部の經典である。正確な編書年代は不明であるが、元末明初に編纂されたものとされている[1]。

この雷法とは、雷の力を呪力の源泉とし、雷部に所属する神将・神兵を使役して目的を達成する呪術である。北宋末の徽宗皇帝の時代に、歴史の舞台に登場し、その後各地に興っていた様々な呪術が道教教団によって正式に採用され、驅邪・祈雨あるいは国家祭祀体制の維持といった目的に役立てられるようになったと考えられる。宋代には、道教の発展の中でその後に大きな影響を及ぼした新しい流れが登場しており、雷法はこのようにして成立した呪術の代表的なものである[2]。

雷法の文献には理論を説いた文献と呪術を伝える文献がある。呪術を伝える個々の文献の構成としては、まずその呪術の由来を記した序文が載せられる。次にその呪術の守護神となっている神明が「主法」として挙げられ、使役する神将の名前が「将班」として列挙される。そして目的に沿った瞑想方法・符・呪文などが記述される形となっている[3]。

『道法會元』に含まれる図の電子化は宇陀則彦、松本浩一の両研究室の共同で行われ、林宏美によって報告がなされている[4]。1923～1926年にかけて上海涵芬樓から影印刊行されたものを、台湾の新文豊出版会社が再び影印、刊行した『道法會元』を底本とし、図画像ごとの電子化およびページ単位の電子化を行っている。この際に作成されたシステムでは、ページによる検索や符名による検索が可能となっている。また、この電子化に続いて符名による分析支援システムを構築したのが瀧沢ふみである[5]。これは、符名が用法や神将の名前、効果などの組み合わせにより構

成されていることから、符名の文字列の構造を分析することで何らかの発見があるのではないかと考えて行われたものである。この分析支援システムは、排列表示分析と文字列頻度分析から構成されており、符名の文法的・意味的構造の表示や構造に近い符の比較などが可能となっている。

3. 研究の目的

本研究では、『道法會元』に含まれる図の内、符名に使用されている用語の統制を行った。先に述べたように、『道法會元』に含まれる図の電子化により、符名からの検索が可能となっている。しかし、例えば同じ晴という気象現象を起こすことを目的とする「祈晴符」と「止雨符」では、共通する文字列がないため、共通の意味を持つことを発見できない。

このように符名に使用されている用語は多種多様であり、同様の意味や同じ神将を示すものであっても様々な語が使用されている。そのため、符名からの検索を行う際に検索漏れが生じることが考えられる。そこで、符名に使用されている用語の統制を行い、同様の意味、同じ神将を表す用語の整理を行うことで検索の再現率を向上することを目的として本研究を行った。

4. 統制の範囲

『道法會元』には様々な種類の呪術が混在しており、使役する神将などが異なるいくつかの呪術、即ち符の系統が存在している。今回の統制にあたっては統制の対象とする符の系統を限定することとした。

『道法會元』に含まれている符の系統については、松本浩一、二階堂善弘の研究を参考とした[1][2]。両氏の説の比較を表1に示す。

表 1：符の系統

松本浩一		二階堂義弘	
符の系統	巻	符の系統	巻
清微派	1-55	清微派	1-55
火師派	56-153	「神霄」「雷霆」「上清」を冠した方術	56-
新神霄派	198-	民間系の方術	200-

ここでは、松本の分類した符の系統の呼び方に倣うこととする。巻 200以降については様々な法術の系統が混ざっているため、今回対象とはしないこととした。巻 56からの火師派は『道法會元』全 268巻中最も多い分量を占めていると言える。そのため、この火師派に含まれる範囲を統制の主な対象とした。この火師派の範囲からは、個々の符に関する説明の分量が多い巻 56から巻 94までを統制の対象とした。また、清微派は符を含む巻が少ないことから、符を多く含む巻を選択し統制を行うこととし、5巻を統制の対象とした。

5. 符名の分類と整理

統制を行うにあたり、まず統制の対象とするデータをエクセルに入力する作業を行った。入力の対象としたのは以下の項目である。

- ①中華道蔵における巻数・ページ数
- ②道法會元における巻数
- ③符名
- ④その符が使用される儀式名
- ⑤目的
- ⑥神将名
- ⑦付記

①及び②のデータは個々の符を判別するために使用した。③符名は、図の直前に記述さ

れている名称を符名として採用し、記述方法については、先行研究である林宏美氏の論文に記載されている方法を参考として行った[4]。⑤及び⑥は、符の記載されている前後の説明や呪文より抜書きをし、あるいは符名から判断できるものについては符名から記述した。この作業により、計 408 件の符についてのデータ入力を行った。

符名に含まれる語の統制を行う上で、まず符そのものの分類を行うこととした。入力した符のデータから、符名に含まれる用語の種類は大きく以下の 3つに分類することができると考えられる。

- ①符名に目的を含む符（例：「祈晴符」）
- ②符名に神将名を含む符（例：「欸火符」）
- ③符名に使用法・形態が含まれるもの（例：「佩帶符」、「胃字符」）

5. 1 目的を名称に含む符の分類

今回使用したデータの中では、目的を名称に含む符が最も多くなっている。そのため、この分類については3段階で分類を行った。

この分類の内容を見ると、まずその目的の種類から「気象」「病・駆邪」「儀式」の3種に分類することができる。

「気象」の分類は、何らかの気象現象を引き起こすことを目的とするものを対象とした。この項目では、どのような気象を引き起こすためのものであるかによって細分化し、以下の6項目を分類項目として作成した。

- ・晴を目的とするもの
- ・雨を目的とするもの
- ・晴・雨の双方の目的で用いられるもの
- ・雪を目的とするもの
- ・虹を断つことを目的とするもの
- ・蝗を駆逐することを目的とするもの

本来は気象現象ではないが、「気象に関する

もの」の分類に含めたのが「蝗を駆逐することを目的とするもの」である。蝗は気象現象ではないが、農耕社会にとって蝗による害は深刻なものであり、避けることのできない天災であったという点で「気象」に含めることができるかと判断した。

「病・駆邪」の分類は、病を治すことを目的とするもの、また不吉なものや災いから身を守ることを目的とするものを対象とした。この2つの目的を1つの項目にまとめた理由としては、『道教と中国文化』に「道士が邪気をはらい病を治す」[6]とあるように、邪気や鬼神をはらうことと病を治すことは深く関係し合っていると言える。また、「芟邪治病符」という符の名称があるように邪を退けることと病を治すことが1つの符名に含まれているものもあるため、「病を治す」ことを目的とするものと「祟りから身を守る」ことを目的とするものを1つの分類にまとめることとした。また、「邪を退ける」ことと「祟りから身を守る」ことは必ずしも同一ではないが、ここでは1つの分類として扱うこととした。この分類では、その目的の内容により細分化し、以下の6項目を分類項目として作成した。

- ・病を治すことを目的とするもの
- ・邪を払うことを目的とするもの
- ・家・人を守ることを目的とするもの
- ・穢れ・厄を払うことを目的とするもの

「儀式」の分類は、「信香符」や「浄壇符」など、儀式の中で使用される目的のものを対象とした。この「儀式に関する符」は研究者によってその符の意味の捉え方が異なるものが多く、目的により分類を行う意味が少ないと言える。そのため、「儀式」の分類では簡単な分類を行うのみとした。分類方法としては、「信香」「府を開く」「壇を清める」といった

ものの他、「戸に関するもの」というように「○に関するもの」という形で分類を行った。

5. 2 神将名を名称に含む符の分類

神将名を名称に含む符の整理では、同じ神将を使役している符を判別する必要がある。しかし、「救火符」と「中天律令鄧變符」が同じ神将を使役しているように、同じ神将であっても様々な表記の仕方があるため、符名のみから同じ神将であることを判断することは難しい。そこで、符の前後に記載されているその符の効果などについての記述や、その符が含まれている呪術の「主法」や「将班」についての記述から、使役されている神将を判断し、同じ神将を使役している符をまとめる作業をおこなった。ここでは、同じ神将を総括する用語には、その神将名を表すのに最も多く使用されている用語を使用した。また、直接神将名は含まないが、「召將符」のように神将を呼び出すことを目的としている符についてもこの分類に含めることとした。

5. 3 使用法・形態を名称に含む符の分類

「胃字符」や「炁字符」など、その符の形が符の名称に含まれるもの、「吞符」や「熏符」など使用法が符の名称に含まれるものをこの項目に分類した。符の形や使用法については対称となる符の数も少なく、また共通する部分がほとんどないため、細分することが難しい。そのため、「符の形」と「使用法」の2つに分類するのみに留めた。

6. 統制表の作成と検証

符の分類で作成した分類項目を使用して、統制表を作成することとした。統制表では、符名に含まれる用語をキーワードとして切り出し、それを符の分類で作成した分類項目に従って分類を行うこととした。

ここでは、キーワードとは、符名の中で目的あるいは神将などを示している部分を指すものとする。キーワードとしての切り出しは以下の原則に従って行った。

① 2つの異なった概念を含む場合は2つに分けて考える。

② シリーズ名や注記はキーワードとして切り出す対象には含めない。

①では、例えば「散雲舒日符」について「散雲」、「舒日」のように切り分けを行った。このように複数のキーワードが一つの符名から切り出された場合はそれぞれをキーワードとして分類する。またひとつの符名に含まれているキーワードであることから、キーワード間に関連があるものとし、関連語という項目を立て、記述を行った。この例では、「散雲」のキーワードの関連語として「舒日」を記述し、また「舒日」自体もキーワードとして記述を行っている。

②では、例えば「梵炁信香符」について、この符名の他に、他の7枚の符とセットで「栢簡信香七符」という符名が付けられていた場合、「栢簡信香七符」はシリーズ名として記載したが、これについては統制の対象外とした。

また、符名から切り出したキーワードの内、同じキーワードのものが複数ある場合は、それをまとめ、そのキーワードの出現回数についての記述を行うこととした。また付記という項目を設け、符名の分類の際に符の記載されている前後の説明や呪文より抜き出した目的や神将について記載した。統制表で作成した項目について以下に例を挙げる。

表2：統制表の例

分類 1	分類 2	分類 3	キー ワード	出現 回数	関連 語	付記
気象	晴を 目的 とす るも の	晴を 祈る	祈晴	7	翼日 蛇	焔火 大神
			催晴	2		
			開晴	1	信香	
			翼日蛇	1	祈晴	
			舒日	1	散雲	
			焔灼	1	撥雲	
			開暘	1	散陰	

6. 1 目的を示すキーワードの統制表

目的を名称に含む符は他のものと比較して数が多く、分類も細分化されているため、分類1において、「気象」「病・驅邪」「儀式」の分類をすることとした。また分類3については、「気象」「病・驅邪」のキーワードのみこの段階までの分類とした。また付記においては、符名の分類の際に使役している神将が判明している場合はその神将名を記載することとした。

目的を示すキーワードの統制表の特徴を「気象」「病・驅邪」「儀式」の分類ごとに挙げる。まず、「気象」の分類では「晴を祈る」・「雨を祈る」・「雷電を起こす」の3つの分類に含まれるキーワードの種類と出現回数が、他の気象の目的に含まれるキーワードの種類と出現回数と比較して多いという点が挙げられる。ただし、「雷電を起こす」の分類に含まれるキーワードについては注意が必要であると言える。これは、「雷」や「電」は単なる気象現象を表している場合もあるが、他のことを意味している場合もあるためである。例え

ば、「起雷雷火符」にキーワードとして含まれている用語は「起雷」と「雷火」である。しかし、この符に関する説明部分には、「神威降、滅邪精。」とあり、気象現象を起こすことを目的とするのではなく、邪精を滅することを目的としていることが分かる。この他にも「雷火伐邪符」や「飛電斬鬼符」など、「雷」「電」の字をキーワードに含む符が多数存在しており、「雷」や「電」によって邪を払うという意味を持つ符名が多いと言える。また、「雷」の字に関しては神将名の1つである「五雷」や「火雷」といったキーワードにも含まれている。そのため、「起雷」や「起電」の語を使用して検索を行う場合は、多くのノイズが含まれることを意識する必要があると言える。ここでは「起雷」などのキーワードについては「気象」・「病・驅邪」の両方に分類することとした。

また「病・驅邪」の分類の特徴としては、「気象」の分類に含まれるキーワードとは異なり、複数回使用されているキーワードが少なく、ひとつのキーワードが占める比重が少ないという点が挙げられる。

「儀式」の分類の特徴としては、「信香」というキーワードの出現回数が特に多いことが挙げられる。この「信香」では、関連語として「祖元君」や「魏元君」など「信香」の対象となるものが複数挙げられている。

6. 2 神将名を示すキーワードの統制表

分類1には「神将」と記載し、神将名を示すキーワードをこの分類の下に置く。分類2には、神将名を記述する。この神将名については、検索する際の便宜を考え、符名に含まれている形式ではなく、研究者がよく使用する神将名の記述を用いることとした。今回は、

二階堂善弘の記述する神将名を参考として、記述を行うこととした。具体的には、符名中では「歎火」・「霹靂」・「鄧帥」という語で表されている神将について、二階堂の記述する元帥名に従って、「鄧天君」という神将名でまとめることとしたものなどである。この他、二階堂の記述に従って神将名を記述したものには、「張天君」「辛天君」「苟天君」「畢天君」が挙げられる。また付記では、符の前後に記載されているその符の効果などについての記述や、その符が含まれている呪術の「主法」や「将班」についての記載に含まれている神将名、神将の特徴や目的について記述することとした。

ここでのキーワードの切り出しでは、「歎火五雷符」のように「歎火」と「五雷」の2つの神将名が切り出される場合は、それぞれをキーワードとするが、「霹靂斷虹符<又名雷斧鉞符>」のように、神将名である「霹靂」と目的である「斷虹」が含まれている場合は、「霹靂」をキーワードとし、「斷虹」は関連語に記述するのみとした。

また、神将に関するキーワードの統制では、「使者符」などの神将名を符名に含まないものについては、符名の分類の際に符の前後の説明文から神将名が判断できるものは、その神将に分類することとし、その他のものは、「神将を呼び出す」項目を作成し、そこに分類することとした。

神将に関するキーワードの統制表の特徴としては、複数の符で使役されている神将の内、「鄧天君」「張天君」「辛天君」「五雷」の4つの神将についてのキーワードが占める割合が大きいことが挙げられる。

6. 3 使用法・形態を示すキーワードの統制表

分類1には「使用法・形態」と記載し、使用法・形態を示すキーワードをこの分類の下に置くこととした。符の形・使用法が名称に含まれる符に関しては、「符の形によるもの」と「使用法によるもの」の分類のみを行った状態となっている。符名からキーワードを抜き出した段階においても、それ以上の分類を行うことは難しいと判断したため、キーワードについても、分類2において「符の形によるもの」と「使用法によるもの」の分類のみを行うこととした。

使用法・形態を示すキーワードの統制表の特徴としては、「冒字符」のように符名が短いものがほとんどであり、複数のキーワードに切り分けられるものが少ないという点が挙げられる。

6. 4 検証

検証は、『道法會元』のデータベースに使用されている499件の符名データを使用して行った。このデータはその件数が少ないことから、ノイズを少なくする検索ではなく、検索漏れを防ぐための検索を目的として検証を行うこととした。

神将についての検索では、研究者が著書で使用している神将名を使用した場合の検索と、統制表を利用した場合の検索を比較することとした。今回検索に使用したのは「九天律令大神炎帝鄧天君 變, 伯温」である。この神将について松本浩一、二階堂善弘が著書で使用している語は「鄧天君」であった。そこで、「鄧天君」で検索を行った場合と、統制表を使用して検索を行った場合を比較する。

まず、「鄧天君」で検索を行った場合、該当する符のデータはないという結果であった。

そのため、「鄧」の字によって検索を行うと、2件のデータが検索された。一方、統制表のキーワードから検索を行った場合20件のデータが検索された。これは、研究者が神将を示す際に使用している用語と符名中に含まれている用語との間に差異があることを示していると考えられ、統制表を使用することで検索の再現率が向上すると言える。

また、目的による検索では、「病を治す」目的を持つ符について、検索を行うこととした。ここでは、研究者が使用する用語が判断できなかったため、一般的にこの目的から想像できる語であると考えられる「治病」・「病」の語を使用した検索と、統制表を使用して検索を行った場合を比較する。

まず、「治病」で検索した結果としては3件のデータが検索され、「病」で検索を行った結果としては6件のデータが検索された。一方、統制表のキーワードから検索を行った場合23件のデータが検索された。この検索では、検索対象としたデータが少なかったため、判断が難しいが、「病を治す」目的に関する検索結果から見ると、統制表を使用して検索を行うことにより、漏れの少ない検索が行えるようになったと考えられる。

7. まとめ

本研究では、神霄派と清微派の符を対象として符名に含まれるキーワードの統制表の作成を行った。統制表の作成に当たっては、符の単位での分類を行い、それを基として符名から切り出したキーワードの統制を行った。

これらの統制作業から、今回の統制範囲において、よく使用される神将や目的に偏りがあることが分かった。統制表における問題点としては以下の4点が挙げられる。

①キーワードの切り出し方

- ②複数の意味を持つキーワードの扱い
- ③目的と神将の関連性について
- ④階層関係にある神将名の分類について

今後はこれらの問題に取り組んでいく必要があると考える。

8. 参考文献

- [1]二階堂善弘. 道教・民間信仰における元帥神の変容. 大阪, 関西大学東西学術研究所, 2006, 256p.
- [2]松本浩一. “『道法会元』—道教呪術の集大成”. 道教の経典を読む. 東京, 大修館書店, 2001, p.236-248.
- [3] 松本浩一. “第2章 符籙呪術論—道教の呪術—”. 道教の教団と儀礼. 東京, 雄山閣出版, 2005, p.260-283, (講座 道教, 2).
- [4] 林宏美. 研究支援を目的とした歴史資料の電子化. 筑波大学卒業論文, 2001, 28p.
- [5]為沢ふみ. 道法會元における護符分析支援システム. 筑波大学卒業論文, 2003, 31p.
- [6]葛兆光. 道教と中国文化. 東京, 東方書店, 1993, 451p.